

病害虫発生予察情報予報第 5 号（9 月の予報）

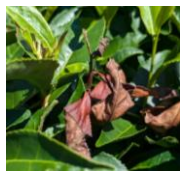
佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稻 (山間早植え)	トビイロウンカ	並	 ホソハリカメムシ  イネカメムシ
	紋枯病	やや多	
	斑点米カメムシ類	多	
水稻 (普通期)	トビイロウンカ	並	
	穂いもち	やや少	
	紋枯病	やや多	
	斑点米カメムシ類	多	
	コブノメイガ	並	
	白葉枯病	並	
	1. 斑点米カメムシ類 薬剤防除は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に行うが、発生が多い圃場では穂揃い期と乳熟期（穂揃い期の7～10日後）の2回薬剤防除を行う（令和7年8月6日付け病害虫発生予察注意報第1号参照）。なお、出穂前にイネカメムシの発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、不稔の発生を防ぐため、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。		
2. 紋枯病 発生が多い圃場が一部で認められる。各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。			
3. トビイロウンカ 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。			
4. コブノメイガ 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期である発蛾最盛期の約7日後に薬剤防除を実施する。			
水稻全般	1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺的环境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。		
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	 ハスモンヨトウによる 白変葉
	カメムシ類	多	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
	1. ハスモンヨトウ フェロモントラップでの誘殺数は平年並で推移しているが、今後本種の増殖に好適な気象条件が予想されており、発生が増加するおそれがある。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。 2. カメムシ類 莢の伸長初期から子実肥大中期に防除する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。 3. 紫斑病 若莢期～子実肥大中期に薬剤防除を実施する。		
イチゴ	うどんこ病	やや少	 炭疽病による葉の汚斑型病斑
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	並	
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや少	
	1. 炭疽病 現在の発生量は平年並だが、今後、台風等の強風雨により急激に増加する可能性がある。長雨や台風の襲来が予想される場合には、予防防除を徹底する。また、灌水や管理の際に苗をよく観察し、葉の汚斑型病斑や立枯れ等の発病株を認めた場合は、その周辺株も含めて速やかに圃場外に持ち出し処分する。特に定植前は苗の選別を徹底する。		
アスパラガス	茎枯病	並	 褐斑病
	褐斑病	少	
	斑点病	やや少	
	アザミウマ類	並	
	ハダニ類	多	
	1. ハダニ類 一部の圃場で発生が増加している。多発生すると防除が困難となるため、虫見板への払落とし等により発生状況を確認し、寄生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。 2. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬剤が茎葉内部や株元まで到達しにくいので、不要な茎葉は整理する。またかけムラが生じるのを防ぐため、株外側からの散布に加えノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど、十分な薬量で丁寧に散布する。		
タマネギ	1. べと病、乾腐病 苗への感染を防ぐため、育苗圃のバスアミド微粒剤による土壌消毒を確実に行う。また、乾腐病菌は、育苗トレイに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、トレイは必ず新品もしくは消毒したもの（付着した土を水洗して除去した後、60℃の温湯に10秒間浸漬、あるいはケミクロンG 1,000倍液に10分間浸漬）を使用する。		
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ シロイチモジヨトウ)	やや多	 シロイチモジヨトウ

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
野菜・花き共通	1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモヨトウ） フェロモントラップでの誘殺数は、概ね平年並～やや多い傾向で推移しているが、今後これら害虫の増殖に好適な気象条件が予想されており、発生が増加するおそれがある。各園場での発生状況を確認し、若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する（令和7年8月8日付け病虫害対策資料第11号参照）。		
	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
果樹全般	1. 果樹カメムシ類 今年は餌となるヒノキ球果の結実量が多いため、今後、本虫の発生量が平年より多くなると予想される。そのため、果樹園への飛来を警戒する必要がある。地域によっては、9月上旬頃からヒノキ樹から離脱し始める可能性がある。必ず園内外をよく観察して、飛来が確認されたら、直ちに薬剤を散布する。		
	2. 夜蛾類 気象予報では気温が高いと予想されている。夜温 25℃以上の日が続くと活動が活発になり被害が多発するおそれがあるため、忌避灯の設置など防除対策を徹底する（令和7年7月2日付け病虫害対策資料第6号参照）。		
カンキツ	かいよう病	やや多	 かいよう病
	黒点病	やや少	
	ミカンハダニ	多	
	チャノキイロアザミウマ	多	
	1. 果実腐敗対策 収穫時に果実に傷を付けないよう丁寧に扱う。傷が付いた果実、日焼け果や裂果等は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。薬剤は、収穫 7～10 日前に薬液が霧状になるノズルを使いかかりムラがないように果実全面に散布する。なお、薬剤散布後に 100 mm 以上の降雨があった場合は再散布する。		
2. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。なお、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では、必ず薬剤を散布する。			
3. ハナアザミウマ類 9月は気温が高く、降水量がやや少ないと予想されており、被害の発生が多くなるおそれがある。着色期の果実被害を防止するため、発生源となる園内及び園周囲の雑草は、着色期前までに除草を行うとともに、園内をよく観察し、被害が発生し始めたら早急に薬剤を散布する。			
4. ミカンハダニ 発生が多い園では、早急に薬剤を散布する。			
ナシ	黒星病	やや少	
	ナシヒメシंकイ	やや多	
	ハダニ類	並	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
ナシ	1. 収穫後の防除（黒星病、ハダニ類、チュウゴクナシキジラミ） 黒星病の越冬菌密度低下を図るため、収穫後の薬剤散布を徹底する。ハダニ類、チュウゴクナシキジラミが多発すると早期落葉の原因となるため、収穫後も圃場を観察し、発生が確認された場合は薬剤を散布する。なお、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして薬液のかかりムラがないようにする。		
ブドウ	べと病	やや少	 べと病
	褐斑病	やや少	
	1. 収穫後の防除（べと病、黒とう病） これらの病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。		
茶	炭疽病	やや少	 輪斑病  新梢枯死症  カンザワハダニ
	輪斑病	多	
	カンザワハダニ	多	
	クワシロカイガラムシ	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャノホソガ	並	
	1. 炭疽病 秋期の発生は、翌春一番茶の収量・品質への影響が大きいため、秋芽生育期（萌芽期～3葉期）の防除を徹底する。		
	2. 輪斑病・新梢枯死症 輪斑病は、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。 新梢枯死症が多発している園が散見される。秋芽萌芽期から2葉期に防除を実施する。		
3. カンザワハダニ 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに防除を行う。			
4. チャノミドリヒメヨコバイ 秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に追加防除を行う。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（5 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

9 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 9 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 7 年 8 月 21 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 9 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	10 (24.5℃)	80	高い
降水量	40	40 (169.3 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：12 圃場

調査日：8月21日

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率0% (平年7.3%、前年0%)

平年比：並(±)

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年並(±)

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図(共通-図1)を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

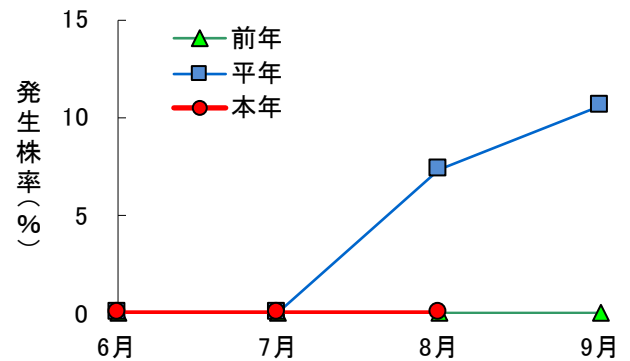


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率 2.7% (平年 1.1%、前年 0.3%)

平年比：やや多(±~+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

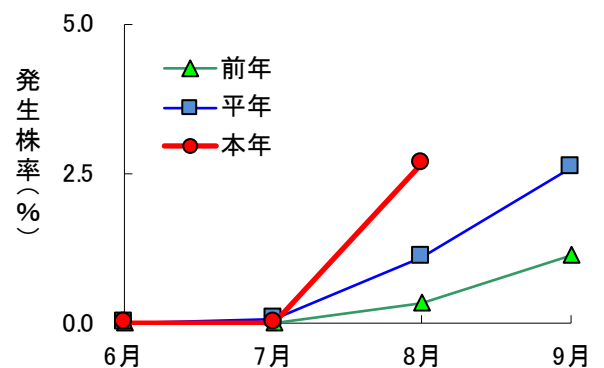


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカス

ミカメ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ等)

水稻(普通期)の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48 圃場
調査日：8月18～22日

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

① 定期調査(図1参照)

発生株率 0% (平年3.3%、前年0.1%)

平年比：やや少 (ー～±)

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年並 (±)

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

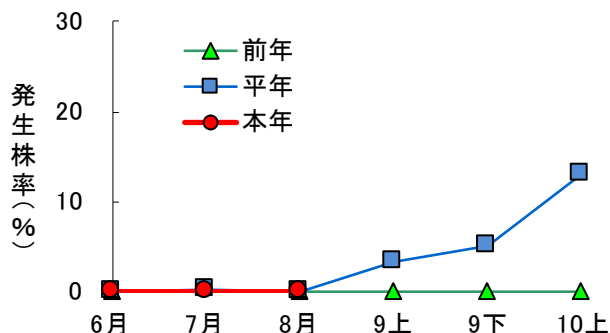
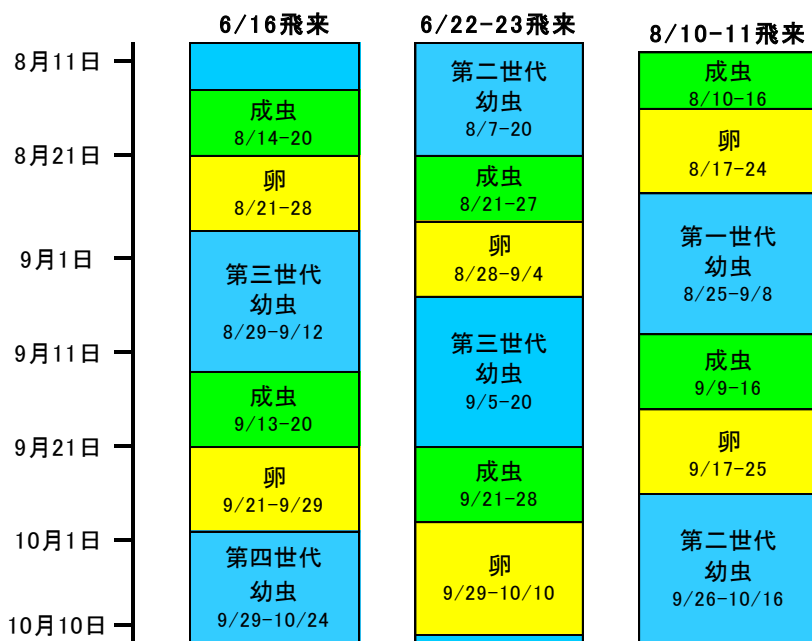


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第3版、2025年8月14日作成）

- 6月16日頃、6月22日～23日（図では6月23日）、8月10日～11日（図では8月10日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（8月14日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。
- 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
- 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

2. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）【葉いもち】

発生株率 1.6%（平年11.0%、前年5.3%）

平年比：少〈－〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件〈－〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちの発生が確認される圃場では、穂ばらみ期～出穂期の薬剤防除を徹底する。穂いもちの発生が多くなると予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。

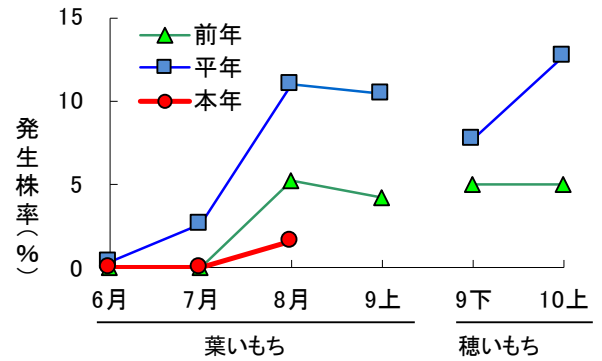


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 3.9%（平年 2.4%、前年 1.7%）

平年比：やや多〈±～＋〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

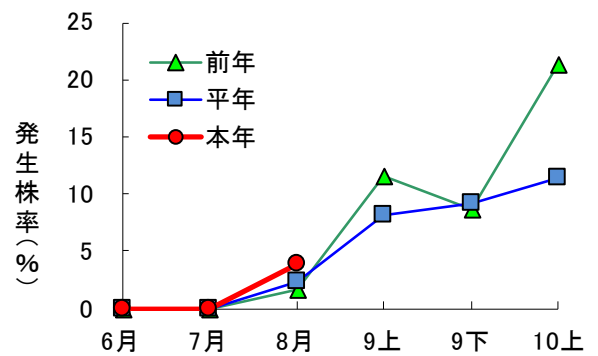


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数（表1）

平年比：並～多、調査地点によるばらつきが大きいものの、斑点米産出能力の高いホソハリカメムシの発生が多い〈±～＋〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に行うが、発生が多い圃場では穂揃い期と乳熟期（穂揃い期の7～10日後）の2回薬剤防除を行う。（令和7年8月6日付け病害虫発生予察注意報第1号参照）
- (2) 出穂前にイネカメムシの発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。

表 1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2025年8月18日～21日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハラカメムシ		シラホシカメムシ類		アカシジカスミカメ		ミナミアオカメムシ	イネカメムシ	
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		成虫	幼虫
佐賀市蓮池町	空地	エノコログサ類	4	1	6	4	1	2	1	0	0	0	0
鳥栖市下野町	空地	エノコログサ類	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0
多久市南多久町	空地	エノコログサ類・オシハ	2	11	12	2	7	7	0	0	0	1	3
伊万里市中野原	空地	エノコログサ類	0	4	1	2	12	3	1	0	0	0	0
伊万里市二里町	空地	ヒエ類	1	3	2	0	0	0	1	0	0	1	1
武雄市橋町	河川敷	エノコログサ類	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0	0
鹿嶋市常広1	河川敷	エノコログサ類	0	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0
鹿嶋市常広2	空地	メシハ・ヒエ類	0	0	8	0	3	1	6	1	0	0	0
吉野ヶ里町箱川	空地	エノコログサ類	1	0	6	4	0	1	0	0	0	0	0
上峰町江迎	道	エノコログサ類	0	0	0	2	0	0	3	0	0	0	0
白石町遠江	空地	ヒエ類	0	1	14	2	1	2	0	0	0	0	0
白石町福富1	河川敷	エノコログサ類	0	0	5	0	3	7	0	0	0	0	0
白石町福富2	空地	エノコログサ類	11	4	9	3	3	31	2	0	0	0	0
本年(平均)			1.5	1.8	5.6	2.2	2.3	4.2	1.2	0.1	0.0	0.2	0.3
平年(過去10年の平均)			2.4	5.6	2.0	1.0	0.6	0.9	8.4	3.7	0.0	0.0	0.0
前年(平均)			5.2	3.4	3.0	0.8	1.0	1.2	34.4	3.5	0.0	0.0	0.0
平年比			並	やや少	多	多	多	多	やや少	やや少	並	多	多

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量: 平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

食害株率 2.3% (平年13.3%、前年43.8%)

平年比: やや少(ー～＋)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(＋)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期である発蛾最盛期の約7日後に薬剤防除を実施する(共通-図2)。

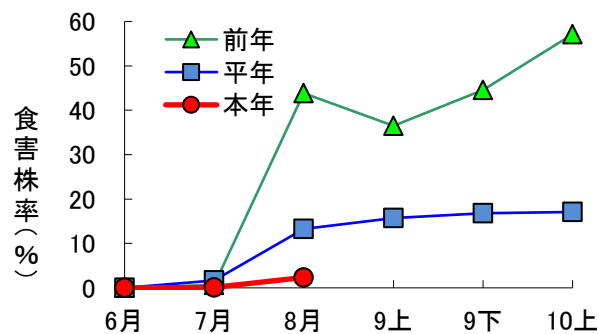
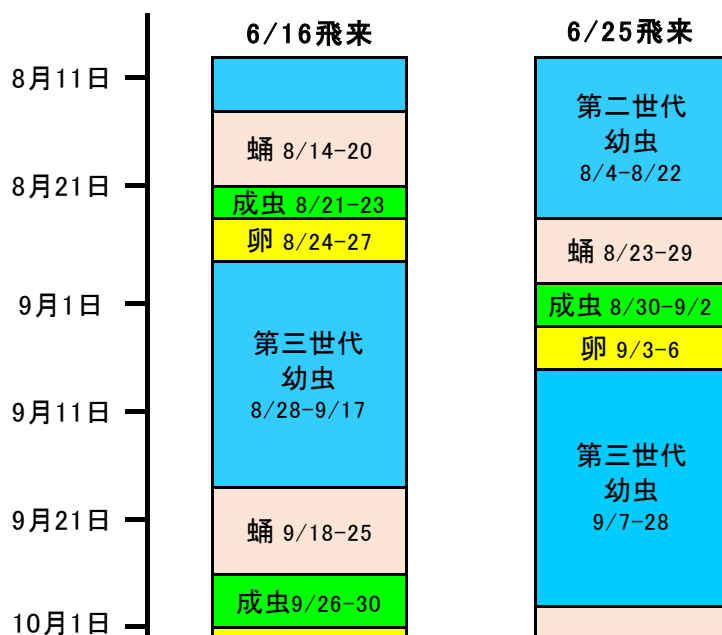


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移



共通-図2 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

1. 6月16日頃、6月24日～25日頃（図では25日）の飛来虫を起点とし、コブノメイガの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月18日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 13℃、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

大豆

[【概要に戻る】](#)

定期調査：22 圃場
調査日：8月19～21日

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率 0.5%（平年 1.5%、前年 0.5%）

平年比：やや少（－～±）

白変葉発生株率 0.4%（平年 0.7%、前年 0.6%）

平年比：並（±）

②トラップ調査（図2 参照）【県内8 地点】

平年比：並（±）

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

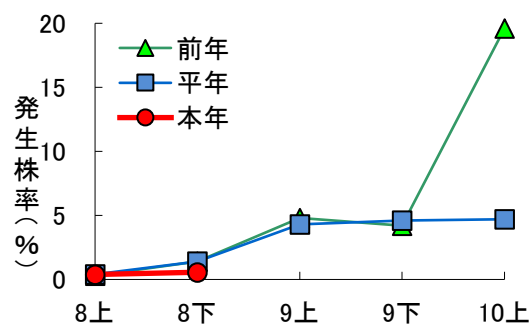


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) フェロモントラップでの誘殺数は平年並で推移しているが、今後本種の増殖に好適な気象条件が予想されており、発生が増加するおそれがある。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。

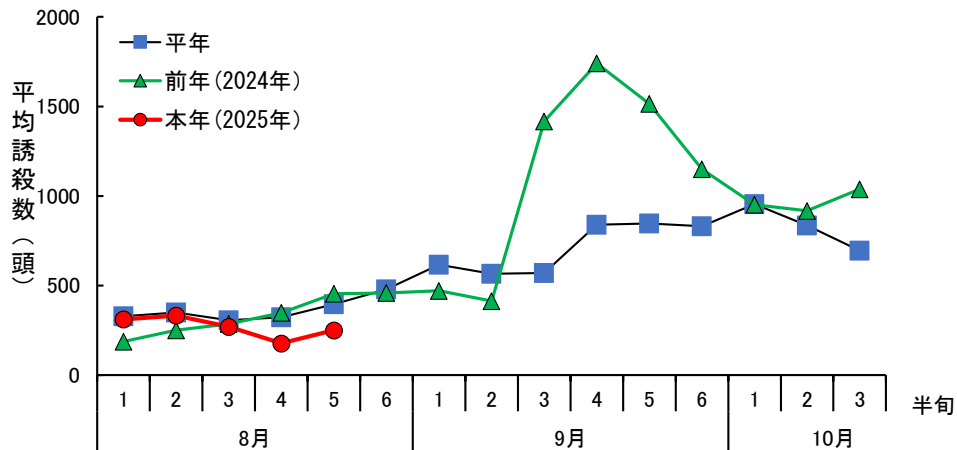


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)
※8月5半旬のみ6地点の平均誘殺数

2. カメムシ類 (アオカメムシ、イモンヅカメムシ、ホリカメムシ、ミミアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.5% (平年 0.1%、前年 0%)

平年比：多 (+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

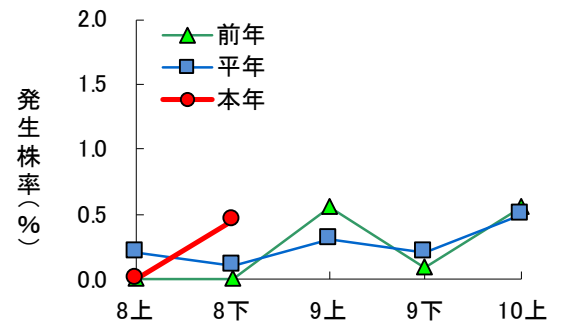


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 莢の伸長初期から子実肥大中期に防除する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場

調査日：8 月 18～21 日

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：0%（平年 0.3%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件（－）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。

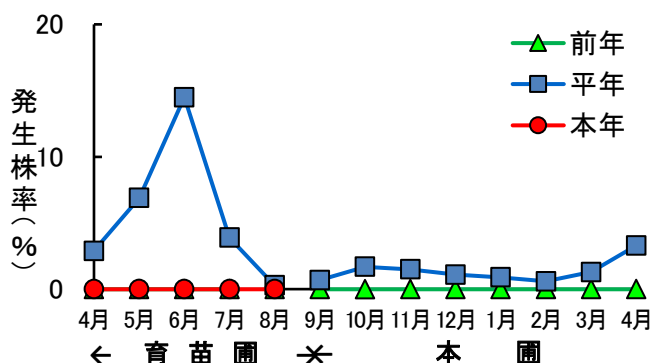


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：0.4%（平年 10.0%、前年 9.2%）

平年比：少（－）

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本圃へ持ち込まないよう、定植前までの防除を徹底する。

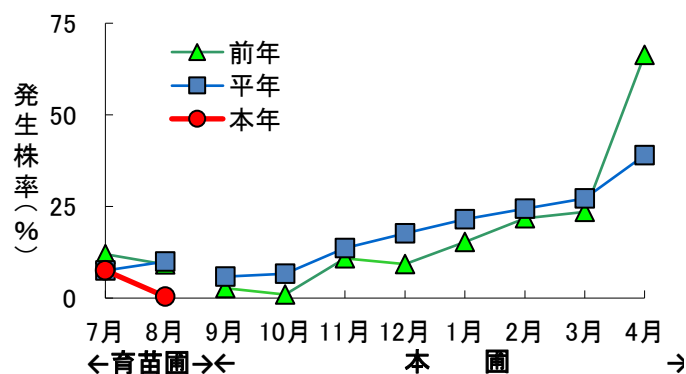


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：8 月 18 日～21 日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

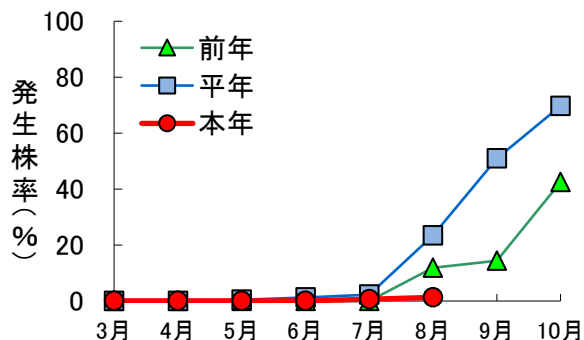


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.3%（平年 23.4%、前年 11.9%）

平年比：少〈－〉

(2)9月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件〈－～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。

(2) 感染してから発病までの潜伏期間が20～30日と長いことから、発病前からの3週間間隔を目安とした予防散布を基本とする。なお、前年多発生ほ場及び降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：11.9%（平年 1.8%、前年 0%）

平年比：多〈＋〉

(2)9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発生すると防除が困難となるため、虫見板への払落とし等により、発生状況を確認し、寄生が認められた場合は直ちに薬剤防除を行う。

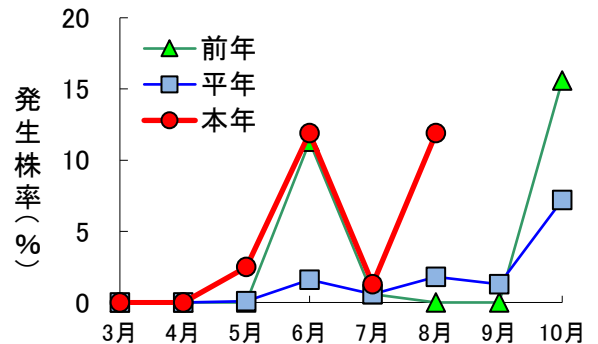


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

野菜・花き共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1,2参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	1.6	並 〈±〉	0.8	0
アスパラガス	0.6	並 〈±〉	0.4	0

②フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年並（図3）。〈±〉

③フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年よりやや多い（図4）。〈±～＋〉

④フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺数は、平年よりやや多い（図5）。〈±～＋〉

(2)9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場での発生状況を確認し、若齢期に防除する。

(2) 本圃定植前に苗での防除を徹底する。

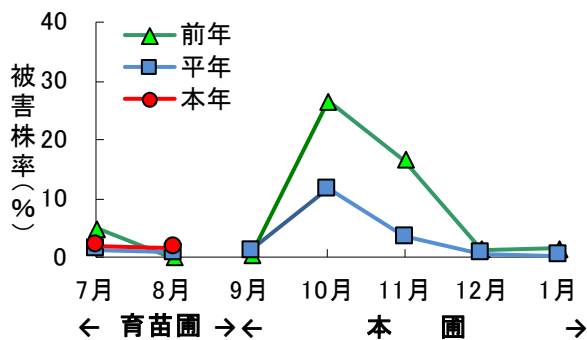


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

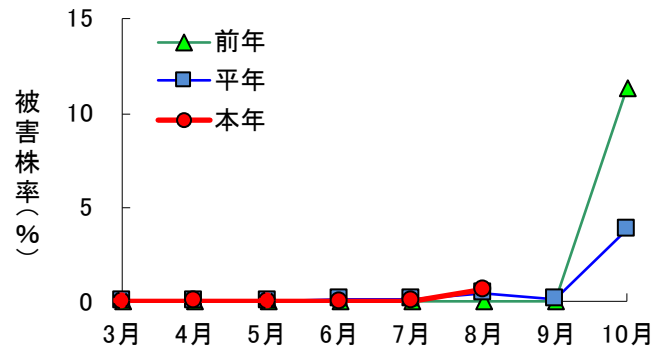


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

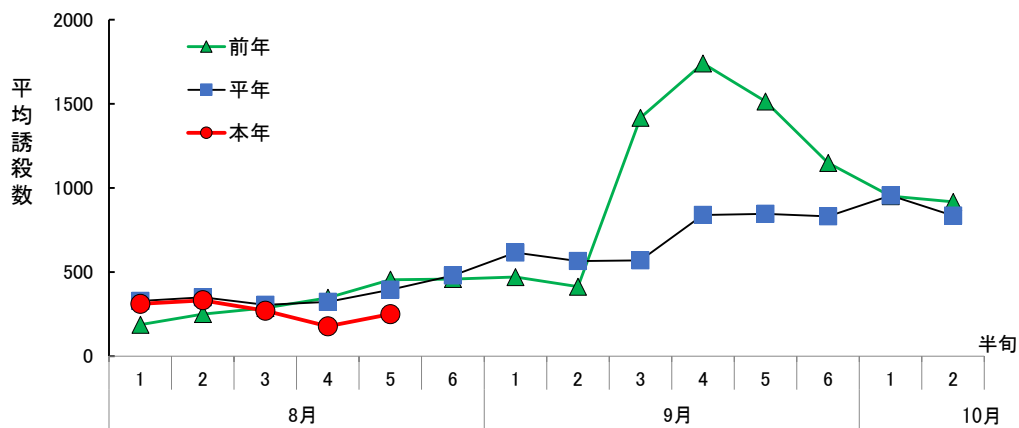


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半月別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)
※8月5半月のみ6地点の平均誘殺数

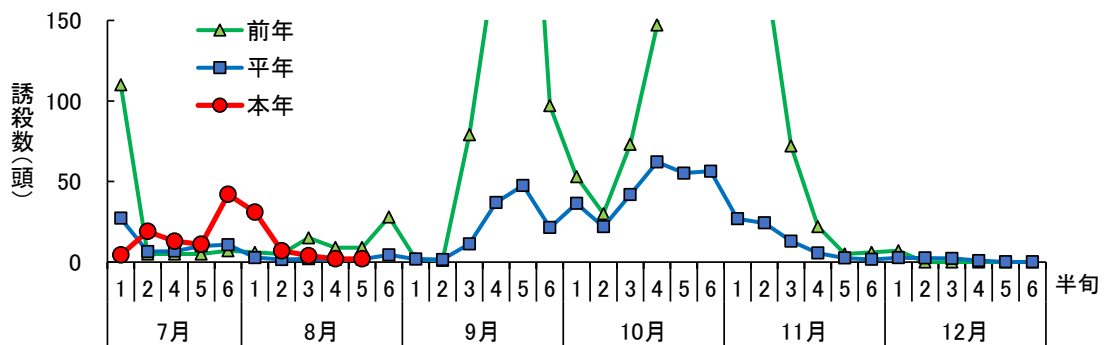


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

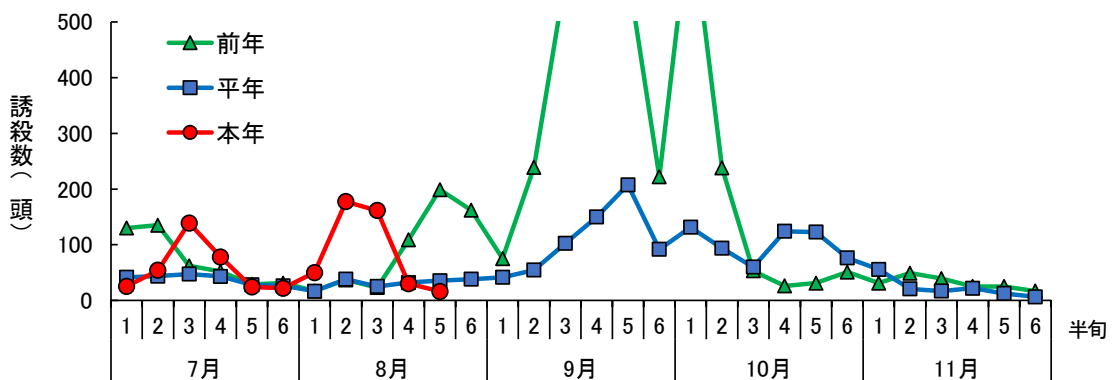


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯（図1、図2参照） 平年比：並（±）

②フェロモントラップ（図3参照） 平年比：少（-）

③ヒノキ球果における寄生虫数（図4、表1参照、8月15～21日調査）

平均成幼虫数：19.5頭（平年18.9頭、前年23.3頭） 平年比：並（±）

④ヒノキ球果における口針鞘数（図5、表1参照、8月15～21日調査）

平均口針鞘数：7.5本/果（平年14.9本、前年16.6本） 平年比：やや少（-～±）

⑤ヒノキ球果の結実量

平年より多く、多発生の条件（+）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 9月もヒノキの球果を餌として増殖し発生量が平年より多くなると予想されるため、園内への飛来を警戒する必要がある。

(2) 果樹園への飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察する。

(3) 飛来が確認されたら、直ちに合成ピレスロイド系剤またはネオニコチノイド系剤を散布する。両系統の薬剤の残効期間は10～15日程度である。なお、ネオニコチノイド系剤は30～50mm程度の降雨で防除効果が低下するため、散布後に同雨量以上の降雨があったら再散布する。

(4) 果樹カメムシ類は主に夕方薄暗くなってから果樹園へ飛来するため、薬剤は夕方に散布すると効果が高い。また、地域全体で一斉防除を行うとさらに高い効果が得られる。

(5) 施設栽培では、開口部に防虫ネット（4ミリ以下）を設置する。

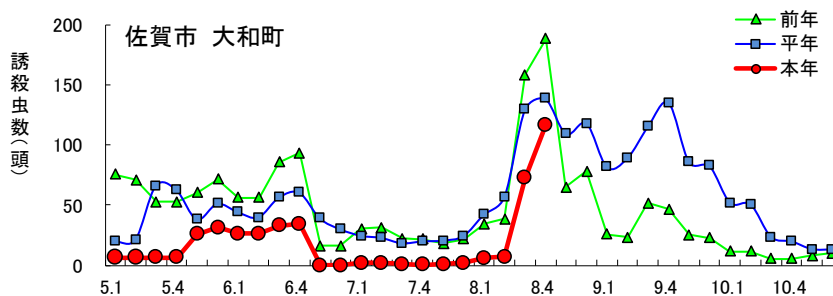


図1 予察灯（佐賀市）による果樹カメムシ類の平均誘殺虫数の推移

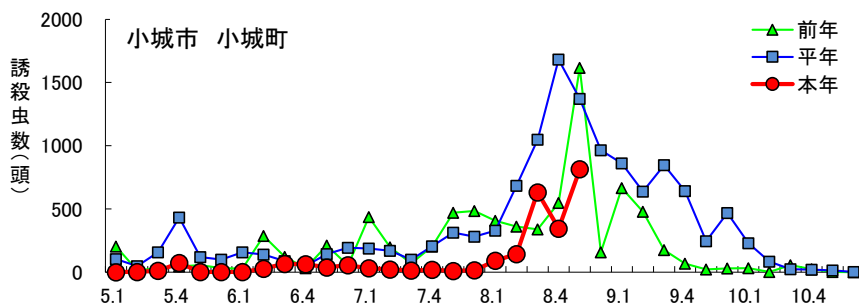


図2 予察灯（果樹試験場調査）による果樹カメムシ類の平均誘殺虫数の推移

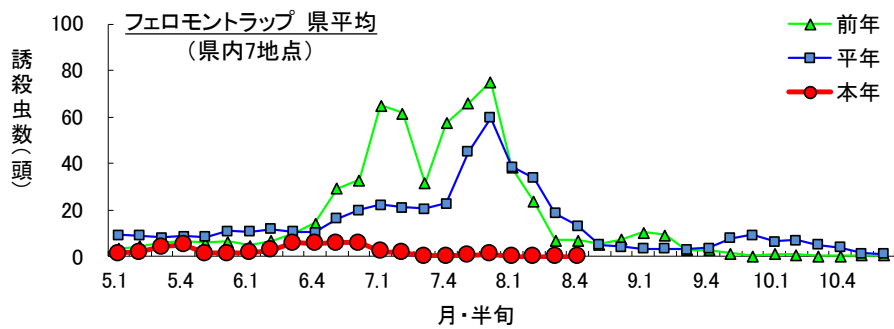


図3 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町(病害虫防除員調査)、小城市小城市町(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)）による果樹カメムシ類の平均誘殺虫数の推移

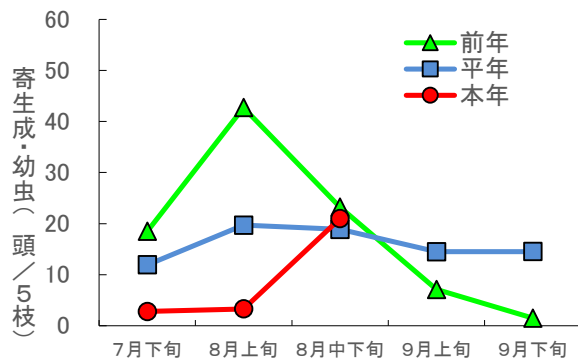


図4 ヒノキ球果における果樹カメムシ類の寄生虫数の推移

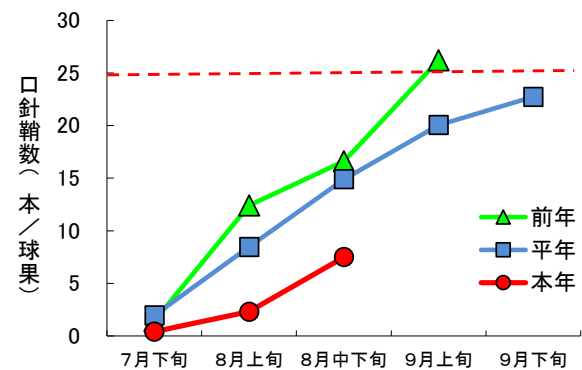


図5 果樹カメムシ類によるヒノキ球果上の口針数の推移

No.	調査地点	ヒノキ球果における 寄生状況 ¹⁾									ヒノキ球果 ²⁾ 着果程度	口針数 ³⁾		
		7月下旬			8月上旬			8月下旬				7月 下旬	8月 上旬	8月 中下旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計				
1	上 峰 町 堤	0	3	3	-	-	-	0	13	13	やや少	0.0	-	1.1
2	神 埼 市 脊 振 町 倉 谷	2	0	2	-	-	-	2	6	8	やや多	0.5	-	1.4
3	小 城 市 三 日 月 町 織 島	0	0	0	1	0	1	5	1	6	やや多	0.3	0.0	2.4
4	唐 津 市 太 良	3	2	5	2	0	2	16	2	18	多	0.2	0.2	5.9
5	唐 津 市 浜 玉 町 平 原	0	0	0	0	0	0	2	1	3	多	0.0	0.0	0.2
6	唐 津 市 北 波 多 成 淵	0	0	0	0	0	0	14	36	50	やや多	0.1	0.3	5.7
7	伊 万 里 市 大 川 町 大 川 野	0	0	0	2	2	4	13	26	39	やや多	0.6	2.0	9.5
8	伊 万 里 市 南 波 多 町 原 屋 敷	0	1	1	2	0	2	11	26	37	中	0.3	0.2	9.6
9	伊 万 里 市 南 波 多 町 笠 椎	0	0	0	-	-	-	5	17	22	中	0.0	-	7.9
10	多 久 市 南 多 久 町	3	0	3	3	1	4	13	0	13	中	0.9	2.7	11.5
11	鹿 島 市 古 枝	13	1	14	2	8	10	6	3	9	多	1.7	5.8	6.6
12	鹿 島 市 嘉 瀬 の 浦	2	8	10	3	4	7	17	6	23	多	0.5	7.9	25.7
13	太 良 町 江 岡	1	0	1	3	0	3	5	1	6	中	0.4	0.6	9.9
14	太 良 町 大 浦	0	0	0	3	0	3	19	7	26	多	0.4	5.3	8.7
	平 均	1.7	1.1	2.8	1.9	1.4	3.3	9.1	10.4	19.5	やや多	0.4	2.3	7.5
	平 年	-	-	11.9	-	-	19.7	-	-	18.9	やや少	1.9	8.5	14.9
	前 年 (R6年)	-	-	18.5	-	-	42.7	-	-	23.3	少	1.4	12.4	16.6

1)ピーティングによる調査

2)ヒノキ球果着果程度：福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少：一部の木では上部にも球果が見られるが、多くの木では上部にも球果がない。
- ・少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果がある
- ・やや少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中：中央部まで球果が見られる木が多い
- ・やや多：多くの木では中央部までたくさんの球果が見られ、一部は下部にも球果がある
- ・多：下部まで球果が見られる木が多い
- ・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの球果が見られる

3)口針数が1果当たり25本を超えるとヒノキ球果が餌として不適となりカメムシがヒノキ球果より離脱する傾向

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場
調査日：8 月 15～21 日

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0.3%（平年 0.08%、前年 0.4%）

平年比：やや多（±～+）

発生果率：0.3%（平年 0.01%、前年 0%）

平年比：多（+）

(2) 9 月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅水和剤（クレフノン 200 倍加用）を定期的に散布する。散布間隔の目安は 20～25 日とする。
- (2) 台風の襲来等強風雨が予想される場合、本病が発生しやすい園および幼木園では、襲来 7 日前～前日までに必ず薬剤を散布する。
- (3) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。
- (4) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。
ただし、枝が遅くまで伸長し本病にかかりやすい期間が長くなるため、強剪定は行わない。

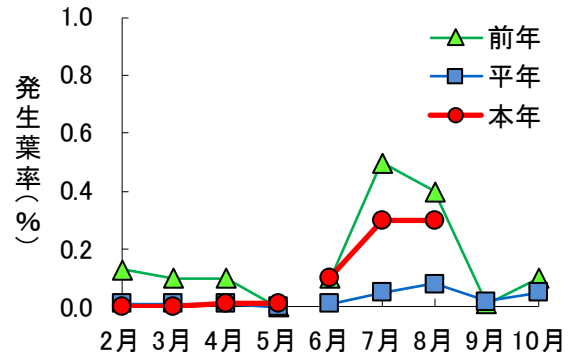


図1 カンキツかいよう病（葉）の発生推移
注）5月下旬までは旧葉を調査

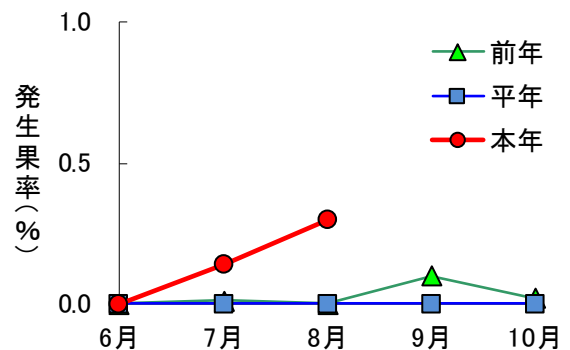


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生果率：6.9%（平年 14.1%、前年 28.0%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 9 月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤を散布した場合、次回の薬剤散布時期は積算降雨量が 200～250mm に達した時点を目安とする。ただし、この雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の薬剤散布を行う。‘せとか’は黒点病に弱いので、露地栽培では積算降雨量 150mm を次回の薬剤散布の目安とする。

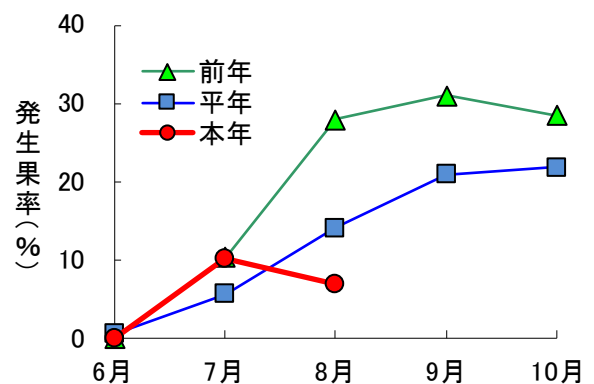


図1 カンキツ黒点病の発生推移

(2) 枯れ枝や剪定枝、切り株等は本病の伝染源となるので、除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、株全体をビニル袋などで被覆して病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：24.6% (平年 3.4%、前年 8.0%)

平年比：多(+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時(寄生葉率 30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満)からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

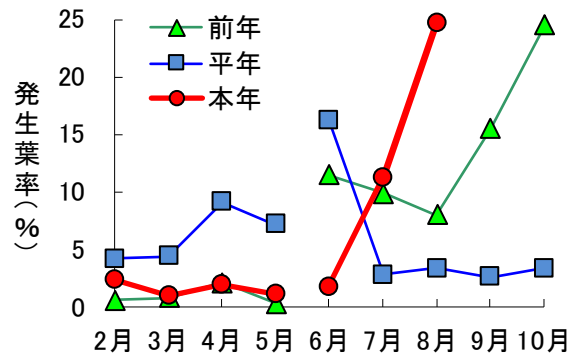


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生果率：0.3% (平年 0.4%、前年 0.4%)

平年比：並(±)

② 黄色粘着トラップ (図2 参照)

平年比：多(+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 後期被害を防ぐため、9月上旬頃に防除を徹底する。

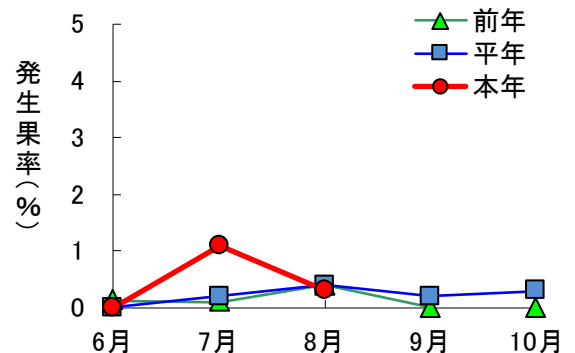


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移

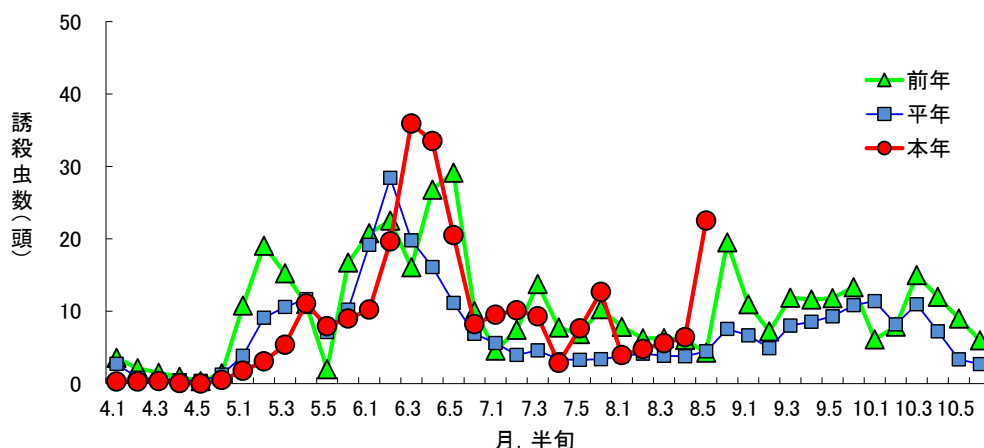


図2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺虫数の推移 (小城市 果樹試験場調査)

ナシ

定期調査：9 圃場
調査日：8 月 21 日

[【概要に戻る】](#)

1. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ（図1 参照） 平年比：並（±）

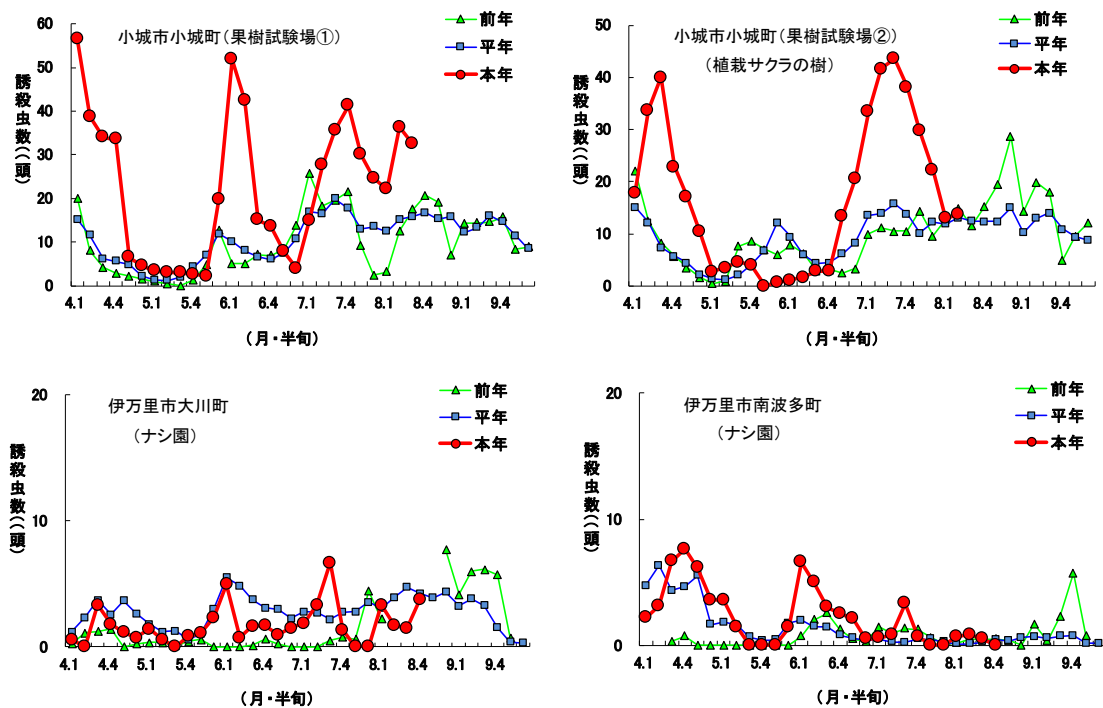


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺虫数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 使用する薬剤の選定（収穫前日数や汚れ）には十分注意し、収穫まで 7～10 日間隔で薬剤散布を行う。
- (3) 交信攪乱フェロモン剤設置園においても、10～14 日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：1.6%（平年9.2%、前年11.6%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 園内をよく観察し、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの防除を徹底する。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) 令和7年7月18日付け病害虫対策資料第9号を参考に防除を徹底する。

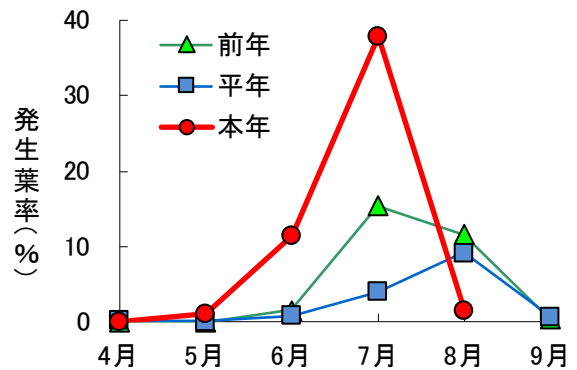


図1 ナシハダニ類の発生推移

ブドウ

定期調査：6圃場

調査日：8月15～21日

[【概要に戻る】](#)

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：4.0%（平年3.5%、前年5.3%）

平年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は降雨によって感染が助長されるので、降雨前の予防散布を徹底する。また、防除効果を高めるため、棚面の上からも散布する。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。
- (3) 本病の罹病葉・果実は伝染源となるので、必ず除去し、園外に持ち出し適切に処分する。

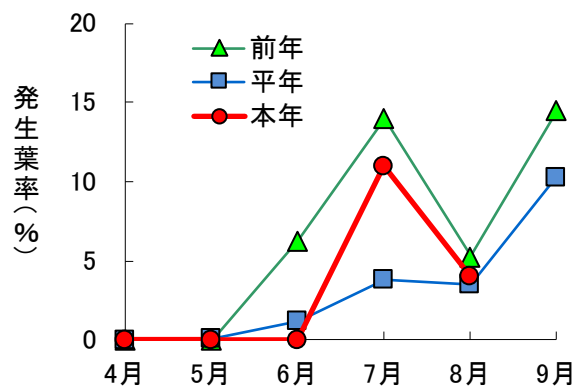


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場
調査日：8 月 19～20 日

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉数：4.3 枚/m²（平年 5.2 枚、前年 13.7 枚）

平年比：並（±）

(2) 9 月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の発生は、翌春一番茶の収量・品質への影響が大きいため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。特に多発園については予防剤（萌芽期）＋治療剤（3葉期）の防除を行う。

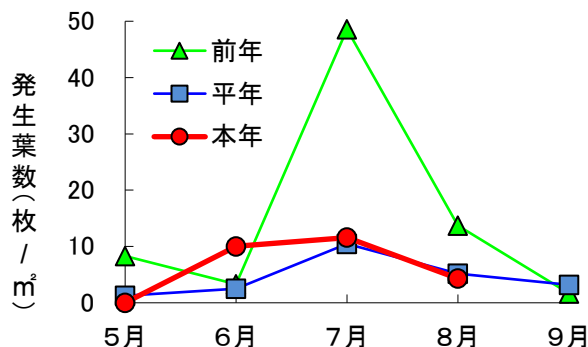


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉数：30.1 枚/m²（平年 3.6 枚、前年 6.4 枚）

平年比：多（＋）

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。
(2) 新梢枯死症が多発している園が散見される。秋芽萌芽期から2葉期に防除を実施する。

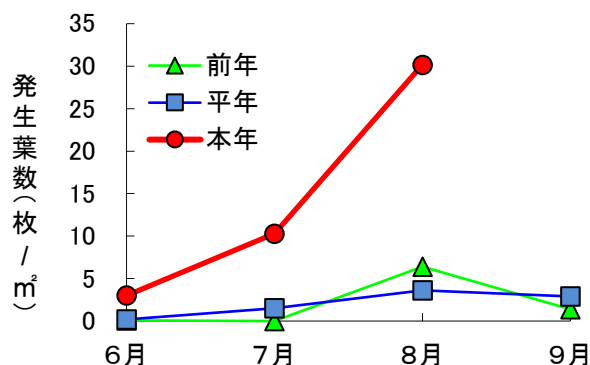


図1 輪斑病の発生葉数の推移

3. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：10.0%（平年 4.0%、前年 7.5%）

平年比：多（＋）

(2) 9 月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件（＋）

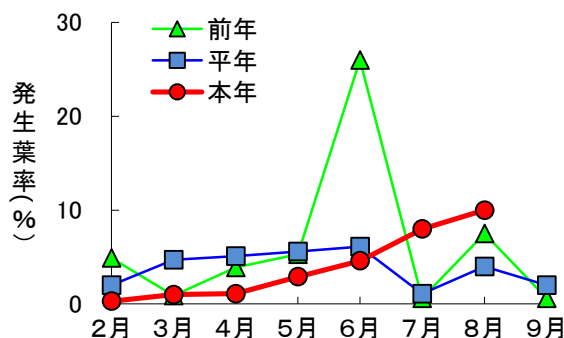


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに防除を行う。
- (2) 散布の際は、本虫の生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。

4. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率（雄繭）：9.3%（平年 14.4%、前年 21.4%）

平年比：やや少（－～±）

発生株率（雌成虫）：6.4%（平年 3.3%、前年 6.4%）

平年比：やや多（±～＋）

(2) 9月の気象予報

降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 日本植物防疫協会の有効積算温度計算シミュレーションによると今年の3世代幼虫の防除適期は平坦部で9月中旬頃、山間部で9月下旬頃である。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期3～4日後に薬剤防除を実施する。

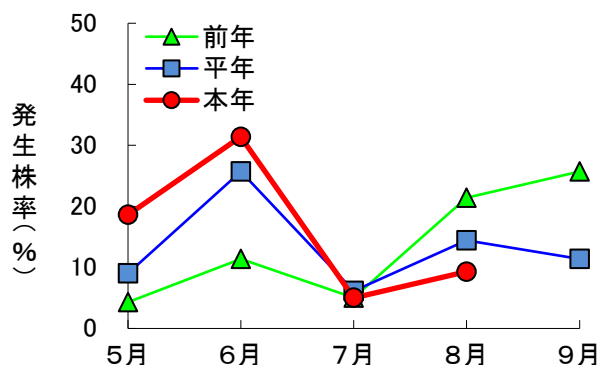


図1 クワシロカイガラムシ（雄繭）の茶での発生推移

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

虫数：23.6頭/4ヶ所（平年 33.4頭、前年 68.9頭）

平年比：並（±）

② 吸引粘着トラップ（図2 参照）

平年比：やや少（－～±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

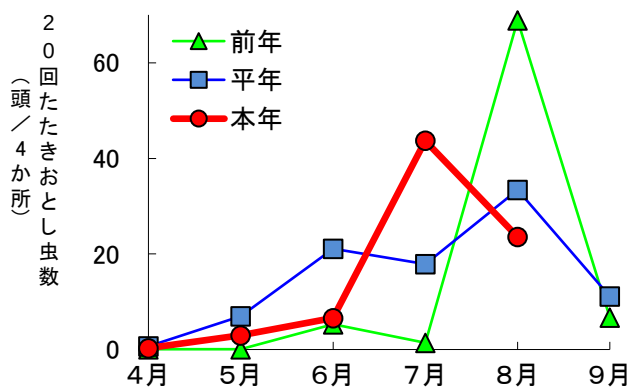


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

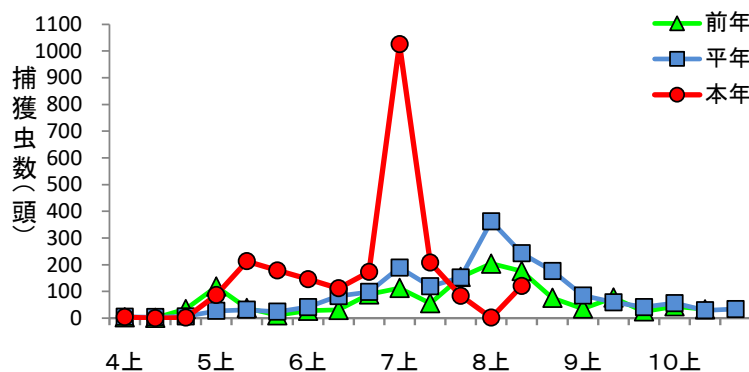


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

6. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：2.0頭/4ヶ所 (平年3.3頭、前年7.1頭)

平年比：並(±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

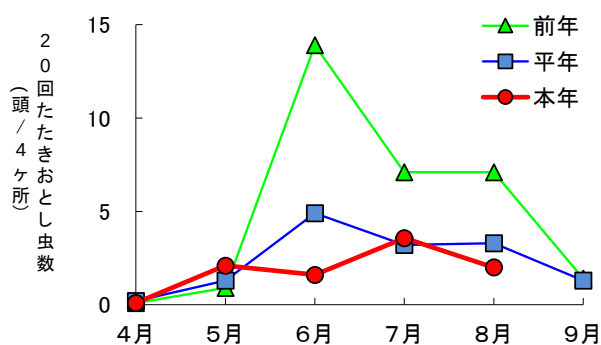


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

